

2、日本医史学雑誌第十七卷附録・思文閣復刻版・昭和十九年。
3、同誌第十六卷附録・思文閣復刻版・昭和十八年。

4、正橋剛二・『方意便蒙』・医譚復刊六四号一頁・一九九三年五月。

(平成五年十一月例全)

『癲癇狂經驗編』の著者土田獻による下気円引き札

岡田靖雄

いっしょに精神科医療史研究会を運営している吉岡眞二が入手した「癲癇狂主方下気円」引き札の文章をよんでいくと、「余があらはす所の癲癇狂經驗編」とあり、これが土田獻によるものであることがわかった。

中神琴溪の『生生堂医談』は一七九六年にでており、日本で最初の癲癇狂専門書『癲癇狂經驗編』は一八一九年の出版で、一八〇〇年前後に癲癇狂への関心がたかまっていた。

この土田の経歴は、「自序」に、陸奥の田舎に生まれ、江戸に遊学のと諸国をめぐり、土田氏をつぎ官についた、などあることのほか不明である。経験例六〇のほとんどは江戸および周辺の人だが、一人奥州二本松百目木村(現岩代町)の人があることから、寺山晃一は、そのあたりの出身でないかと推測している。『呉氏医聖堂叢書』復刻のもので著者は「陸奥達山土田獻翼卿」とあるが、わたしたちがいまみることがで

きる森本では「奥州土田獻翼卿」とだけある(刊本に二種あったか。「達山」といえば二本松にちかい安達太良山がうかぶ。土田は癲癇狂を癲狂(狂気)、癲癇(癲てんかん、癲ヒステリカ)と総論ではわけているが、山田照胤がすでに指摘しているように、経験例の記載はこれとあわない。「発癲」とある例と「発狂」とある例とが、ほとんど同内容のものもある。全体としては、癲では不安・抑うつ状態、てんかんがおおく、狂では興奮状態がおおい。

狂気の主方は下気円であるが、単方のもの、大柴胡加香附湯、大柴胡加香附黄蓮湯などの併用がおおい。癲癇の主方は消毒煉と半夏瀉心湯などとの併用である。土田は下気円、丹砂円、消毒煉を製したと称するが、丹砂円の使用例はのっていない。またこの三葉の処方内容は記載されていない。

今回の引き札は下気円の効能をのべ、あとに「癲癇主方消毒煉」につきすこしのべている。最後に「文政辛巳春再刻」とあり、一八二一年のものである。途中には「文化庚午のはるより、十年来余、みる所のもの千余人」とあり、下気円などの処方えたのが一八一〇年と察せられる。

「肝症とは癲狂をいふ(中略)そのはじめおこる、気さへてねむりがたく、ものごとけうたがひふかく、わくくとして心さだまらず、或はふさぎつよく、時としておどろきおびへ、あるひは気せまり、又はひとりごとといひて、かなしみ、わらひ、いかり、あるいは、もくくとしてものいはず、戸牖をとちて、ひとりおらんとし、人ともいふことなく、又はめ

まひつよく、目つり、口ゆがみ、或はものゝかたちいろくに見へ、またはものゝたゞりあるがごとく〔下略〕。』

「狂症まがらみとは、そのかたちふすことすくなく、氣たかぶり、たべんにして、言語善悪親疎のわかちなく、独語妄走水火をさけず、喜思笑罵、つねなく、かたち鬼神のごとく、其はなはだしきものは、身命をおしまぬものなり、かん病おこたるべからず〔下略〕。』

つまり、この癲狂では不安・抑うつ状態が優位しており、狂症では興奮状態が前面にでている。癲癇の記述は、現在のてんかん大発作に一致する。また、これらの病理および薬物療法も記載されている。この引き札の意義は、引用文のように、精神症状を一般のことばでのべている点にある(漢字は振り仮名つきである)。

(平成六年一月例会)

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

齊藤信夫著『指の文化誌』

「ヒト」は直立歩行により道具を使いだし、結果知的行動を拡大して文明社会を形成して来たが、その中でも「指」は脳の精密工作機械として大きな役割を果している。

指の役割とその展開を、人文科学分野で捉えたものは皆無に等しいが、本書は新潟大学整形外科学教室・手の外科研究班で、長年手指の機能、病理解明に取り組まれた著者が、その研究過程で抱いた、指の呼び名の謂われにはじまるさまざまな疑問に対し、十年に余る歳月をかけ、東西文献の検索と綿密な調査研究結果を括め上げたもので、手の外科専門医としての医学理論と人文科学分野を巧みに交差した『指の文化誌』である。著者はまえがきで、言語学、民俗学の素人が書き貯めたカードの抄録集であると謙遜されているが、内容は入門書の域を越えた、医の文化誌、指の医史書として、未開の分野に大きな足跡を残すものである。

指と呼び方、指と伝達、指と数、指と尺度、指と宗教、指と礼法、指と契約、指と遊び、指とお洒落、指と諺、指と人間関係、指と俗信、指と謎謎、指と性、指と食、指と健康、指と犯罪、指と童話、指と運勢、指と干支、指と占い、指と